

馬耳東風

自給自足

(1) 「多くのボランティアは、...と言う。」とありますが、「このような状態を表す四字熟語に「異口同音」があります。このように体の部位を表す漢字を含む四字熟語には、ほかにもどのようなものがあるか、二つ書きましよう。

(2) ア 「被災地に迷惑をかけたくない」とありますが、災害ボランティアをするうえで、どのような「迷惑」をかける可能性があると考えられますか。あなたの考えを書きましよう。

自家用車で被災地を訪れて交通渋滞を引き起こし、物資輸送や救援活動の妨げになってしまいうこと。

(3) イ 「被災地で...来る。」とありますが、そのようなときに筆者はどうすることがよいと考えていますか。「ボランティア自身が」に続く形で六十文字以内で書きましよう。(、や。や「」なども一字に数えます。)

ボランティア自身が	マニユアルと現実のギャツプに悩
んで、ボラン	ティアルとは何かを考えた、もつと
行動の自由が	利く形で被災者のもとを再び訪
れること。	

60字

※

(4) ウ 「本来ボランティアとはそういうものではないかと思う。」とありますが、筆者の考える「ボランティア」とはどのようなものだと考えられますか。七十文字以内で書きましよう。(、や。や「」なども一字に数えます。)

マニユアル通	りにいかない中でも被災者とか
かわり、悩み	や失敗から自分の間に何が起きるの
かを学び、な	がら、被災者の間のつながりがきり
生み出してい	くもの。

70字

※

課題2

外国語活動を通して、いろいろな体験や学習をしてきたと思います。その体験や学習の中から一つ取りあげ、そこから学んだことを書きましよう。また将来世界とかかわっていくためには、外国語を勉強することに加え、どのような体験をする必要があると思いますか。その理由もふくめて二百文字以内で書きましよう。(、や。や「」なども一字に数えます。)

2※

私は学校の授業で地元を英語で紹介、外国	人にインタビューをしまし、英語で必要だと	話すときは、誰もが理解でき、言葉がだ	きるといこうと。学ば、将来は、それ	世界の人の命を救える医者になり、そ	のために命を救う医者になり、そ	のと理解は言葉の力を伸ばし、そ	でホムスアテイをすれば、多	語でコミュニケーションをとり、そ
---------------------	----------------------	--------------------	-------------------	-------------------	-----------------	-----------------	---------------	------------------

200字 100字

※

受験 番号	
----------	--

3※

課題3 ^{あまこ}明子さんは、岡山県北に住む祖母が急病で入院したことから、^{いちろう}一朗さんを交えて先生と話しました。あとの会話を読んで、(1)～(3)に答えましょう。

先生：先日、おばあさんが救急車で運ばれて、大変だったね。病院まで1時間もかかったんだね。
 明子：そうだったんです。
 先生：資料1をみてごらん。都道府県ごとに人口10万人に対してどのくらいの数の医師が働いているかを示しているグラフだよ。
 一朗：岡山県は全国平均を上回っていますね。日本全体の傾向としては

A

 といえると思います。

(1) 一朗さんの会話文の

A

 にあてはまる内容を、資料1から読みとって書きましょう。

A	東日本では全国平均を下回っているところが多く、西日本では全国平均を上回っているところが多い。
---	--

先生：では岡山県の地域別の医師の数をまとめた資料2をみてごらん。
 明子：aからcの地域のお医者さんの数は全国平均を上回っているのに、dやeまでの地域では全国平均を下回っているわ。
 先生：地域によって十分な人数の医師がいないなど、地域ごとの医師の数に大きな隔たりがあることを「医師の偏在」というんだよ。しかし「医師の偏在」の問題は、診療科でもおこっているよ。もう一度、資料2をみてごらん。
 一朗：本当だ。真庭市では

B

 のお医者さんは岡山県の平均よりも多いのに、

C

 や

D

 のお医者さんの数は岡山県の平均の半分もないね。
 明子：高梁市や新見市では特に

D

 のお医者さんの数が少ないわ。
 一朗：おばあさんが病院まで救急車で1時間もかかったのは、近くに専門のお医者さんがいなかったからだね。

(2) 一朗さんと明子さんの会話文の

B

 と

C

、

D

 にはいる診療科の名前を書きましょう。

B	外科	C	小児科	D	産婦人科
----------	----	----------	-----	----------	------

一朗：ところで、どうしてこうした「医師の偏在」がおこるのですか。理由は何ですか。
 先生：いろいろな理由があるといわれているのだけど、資料3をみてごらん。これは、十分な数の医師がいない地域の病院に勤務できないと考えているお医者さんに、その理由をたずねたものをまとめているよ。
 明子：でも住んでいる場所によって、すぐにお医者さんにみてもらえるかどうかの違いが出てくるのは、おかしいと思うわ。すぐに適切な治療をすれば治る病気でも、治療が遅れると後遺症が残ったり、手遅れになったりすることがあると思うわ。住んでいる場所で、病気を治したり、治せなかったりするの、平等な社会だとはいえないと思うわ。
 先生：そうだね。これからの地方の医療について、「医師の偏在」について、みんなで考えていく必要があるね。

(3) 資料3を参考にしながら、十分な数の医師がいない地域の医師を増やすために有効な方法について考えて書きましょう。

法律などで医師の勤務する場所について定めることが有効だと思う。例えば、十分な数の医師がいない地域では年間勤務することを全ての医師の義務とし、開業しようとするときの条件にすればよいと思う。 (別解)日本全国の勤務医の給与を国が定めて、勤務する場所によって給与に差をつけるようにすることが有効だと思う。都市の病院で働く医師よりも、十分な数の医師がいない地域で働く医師の給与を高くすればよいと思う。
